天領

～その伝えるもの～

歴史が作られた舞台裏
ドラマチックな人間模様
時空を超えた人々の営み
朗らかで人情に富んだ人々の何気ない毎日が、
ゆるぎない文化を育んでいる。

江戸期から昭和初期まで、特色ある
建築様式が残る豆田の町並み

天領
Tenryo Hita
ひた

日田に春の訪れを告げる
「天領日田おひなまつり」。
代々当主が京や大阪で買
い求めたひな人形を展示

掛屋とは、幕府の公金を扱う
金融機関。当時の商売道具
であったそろばんや、銀を量る
秤なども展示している（写真
は廣瀬資料館）

A region under direct control of a Shogunate

Hita became a region under direct control of Hideyoshi Toyotomi during the Azuchi Momoyama period. During the Edo period, it became the center of economy in Kyushu as the home territory of the local governor of the Edo shogunate, and wealthy merchants called Kakeya who supplied goods for the Edo shogunate saw success. Even to this day, the city is referred to as the Little Kyoto of Kyushu, as it retains much of its ancient landscape.

山あいに「都」あり

古くから交通の要衝であった日田。安土桃山時代に豊臣秀吉の直轄地となり、江戸時代には幕府の代官・郡代のおひざ元として、九州における経済の中心をなし、掛屋と呼ばれる幕府御用達の豪商たちが活躍。豆田町・隈町は繁栄を極め、天領文化が花開きました。今でも白壁や瓦屋根の商家が建ち並ぶ豆田町は、当時の地割・町道・水路など、碁盤目状の町割りが残っています。日田にはそんな天領時代の繁栄を物語る町並みが今に息づき、その古い町並みや風情から「九州の小京都」と呼ばれています。

この町並みを残しながら、地域の活性化に努めるまちづくりにも力を注いでいます。平成12年には、下町通り（みゆき通り）で電線の地中化を含む「歴史国道整備事業」が実施され、平成13年には「美しい町並み大賞」を受賞、平成16年には「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。

郡代のおひざ元であった
豆田町に対し、商業の中
心地は隈町。産物店や呉
服店などに遠方からも多
くの買い物客が訪れてい
た。写真は、100余年受
け継がれた味噌や醤油
造りを今も生業としている
「原次郎左衛門味噌醤
油蔵」

山鉾8基が勢揃いする「日田祇園山鉾集団顔見世」。
提灯に灯りがともると、きらびやかな飾りが浮かび上がる

350年の伝統と天領の熱き魂

日田の夏が最も熱く燃える「日田祇園祭」は、疫病や災害を祓う厄除け神事。商人が経済力を持つようになり、町人文化が華開いた江戸時代、豆田町や隈町では競うように豪華な山鉾を作るようになったといわれています。平成8年には、日田祇園の曳山行事が国の重要無形民俗文化財の指定を受けました。

日田独特の高の音が響く祇園囃子が聞こえてくると、華やかな武者人形をあしらった、天を仰ぐほどの山鉾が姿を見せます。豆田地区と隈・竹田地区の町内を練り歩き、夕闇を提灯が照らす頃になると、男衆たちの熱気も頂点に。最大の見せ場は「晩山」。隈・竹田地区の4基の山鉾が集まる「札の辻入り」では、興奮と熱気が町中を包みます。

華麗さ、勇壮さを競い合い、世代を超えて町中が一体となる活気が人々に元気を与えてくれる日田祇園。伝統とともに熱き日田魂を伝え、地域の宝として継承していきます。

山鉾の背面を飾る「見送り」は、ラシャ地に金糸銀糸の刺繍をほどこし、爪には象牙、目玉には高価なギヤマンを惜しげもなく使う。この絢爛豪華さが、天領の栄華を物語っている

天領の遺産をたどって

華やかな一時代を築いた天領日田。人や文化、さまざまなものが交差したこの場所に、数多くの遺産が生まれました。

豆田町は、慶長6年(1601)に、小川光氏が築いた丸山城(後に永山城)の城下町として作られ、後に日田藩主・石川忠総が「豆田町」と町名を改めました。永山城の麓に永山布政所(代官所)が置かれると、豆田は、代官・郡代所の陣屋町として栄え、次第に商家町へと変遷。その一角に在る「草野家住宅」は、300年の歴史を持つ由緒ある商家で、国の重要文化財に指定されました。北部九州における代表的居蔵造町屋であり、近世から近代にかけての都市住宅の移り変わりや商家の生活文化を伝える大型の町家建築として高く評価されています。

九州の情報がすべてこの地に集められ、重要な情報は江戸へと伝える必要があったため、水の利はもちろん、日田代官所と各地を結ぶ陸上交通道路も重要視されていました。6幹線出入りするうち、日田と中津・宇佐四日市の陣屋を結ぶ往還の一部として、「石坂石畳道」がこの頃造られました。馬や牛が通りやすいように設計され、主要な道路として当時の人々の生活を支えました。隈町の掛屋・京屋作兵衛が私財を投じ、周防の石工を招き入れて築道したと伝えられています。

1.天領の文化を伝える品格ある建物や中庭、貴重な品々が残る「草野家住宅」
2.永山布政所や豆田町の当時の様子を伝える絵図
3.全長1.26kmほどあり、山の斜度が高く、16もの曲がり角がある「石坂石畳道」。今も往時の姿をとどめている

文教

～その学ぶべきもの～

聴こえてくる賢者の声
目指すものに向かって
努力を怠りなく続けること。
人の心を動かすのは
人を生かしたいという
真摯な想いなのかもしれない。

咸宜園跡に残る江戸時代に建設された居宅「秋風庵」。廣瀬淡窓の伯父の廣瀬月化の住まいを譲り受け、後に淡窓が移り住んだ。敷地内には、淡窓が書斎として使っていた「遠思楼」、淡窓の歴史を知ることができる「咸宜園教育研究センター」がある

世界に誇る学術都市

江戸時代後期、日田には、全国から門下生が集まる私塾がありました。豆田出身の儒学者・廣瀬淡窓が開いた咸宜園。塾名の「咸宜」とは、「ことごとくよろし」という意味で、一人ひとりの意志や個性を尊重する教育理念を塾名に込めたように、自由で斬新な教育方針を貫き、多くの著名人を輩出しました。

廣瀬淡窓が、江戸時代を代表する教育者の一人として伝えられる大きな理由は二つあります。一つは、咸宜園教育の中で、身分・年齢・学歴を問わない「三奪法」という当時では画期的な入門制度や、毎月成績を公表する「月旦評」を取り入れるなど、門下生たちを平等に教育し、努力次第で昇級できるという指導を行ったこと。もう一つは、咸宜園が江戸から明治という変革期に80年余り続いたことにあります。長きにわたる学校経営の中で、近世最大規模を誇る全国68カ国中、66カ国から5000人を超える門下生が集い、巣立った功績を築きました。

日田市では、咸宜園を茨城県水戸市の「弘道館」、栃木県足利市の「足利学校」とともに、「近世日本の学問・教育遺産群」として世界遺産登録を目指しています。

Bunkyo

In the late Edo period, there was a tutorial school called "Kangien", where students from throughout Japan gathered in Hita. Founded by Tanso Hirose, a Confucianist from Mameda, it turned out the largest number of academics in recent history, under its educational philosophy of respecting the will and personality of the individual.
The teachings of Tanso Hirose are preserved in the school education of Hita today.

1

2

1.淡窓は、天明2年（1782）に豆田町の商家の長男に生まれたが、病弱なため家業は弟の久兵衛に譲り、教育者の道を志した
2.咸宜園の入門簿。入塾の際、住所・姓名・年齢・入門月日・紹介者（保証人）を記入した

今に受け継ぐ咸宜園教育

「治めて後、学ばせる」―これは廣瀬淡窓による、咸宜園教育の根幹を成す言葉です。

咸宜園では、規則正しい生活を実践させる「規約」や門下生に塾や寮を運営させる「職任」など、社会性を身に付けさせながら学力を引き上げる教育が行われました。また、人それぞれの能力を生かし、伸ばす教育を重んじた淡窓は、「鋭きも鈍きも共に捨てがたし　錐と槌とに使いわけなば」とも謳っています。これらの教えは、現代教育にも通じるものであり、咸宜園教育の理念は、日田市教育の中心に位置付けられています。現在、日田市の小中学校では、次代を担う子どもたちの「生きる力」を育むために、地域とともにあゆむ特色ある学校教育を推進しています。

学校教育以外でも、学びのフィールドは広がっています。文化芸術の振興として、「日田市文化振興条例」を制定し、子どもも大人も、幅広い世代に対して、芸術や伝統芸能、文化財、生活文化などさまざまな分野の「文化力」によるまちづくりに取り組んでいます。さらに、ゆとりある市民生活と地域コミュニティを深め、活力ある地域社会の実現を目指します。

ふるさとの歴史や伝統から多くのことを学び、ふるさとを誇りに思う気持ちをいつまでも大切にしながら、夢に向かって努力する人たちが心豊かに輝くまちを創造します。

咸宜園や廣瀬淡窓等に関する調査研究や関係資料の収集、公開等を行う「咸宜園教育研究センター」。咸宜園や淡窓に関する史料の展示のほか、ガイダンス映像や体験学習用教材を揃え、関係図書を閲覧できる

文化創造の拠点である日田市民文化会館「パトリア日田」。市民文化活動への市民の積極的な参画と文化芸術の鑑賞機会の充実を進めている

日田の先哲 Column

いにしえの声に耳を傾けて

歴史ある日田の地から生まれた偉人たち。
豊かな土地が豊かな人材を育んだ。
先哲の功績を紐解けば、
日田の魅力がまた一つ見えてくる。

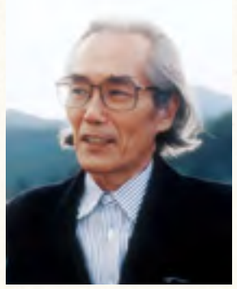
大原八幡宮へと続く水路

廣瀬久兵衛
"水郷"をつくった男
Hirose Kyube

私塾咸宜園の創立者である廣瀬淡窓の弟の久兵衛は、病弱だった兄に代わり、家業の掛屋を継ぎました。そこで理財の才能を余すところなく発揮し、公共土木事業や諸藩の経営コンサルタントのような役目に就き、数々の業績を挙げました。

なかでも大きな功績は、初めて取り組んだ公共土木事業でもあった小ヶ瀬井路の開削でした。日田の町は水利が悪く、水路の必要性が叫ばれていましたが、工事が困難なためそれまで実行されずにいました。しかし、日田郡代の塩谷大四郎の命により、久兵衛はその中心となって難工事に取り組みました。玖珠川から取水し13の村を通り、筑後川へと合流する、総延長2754mの小ヶ瀬井路を開削。事業において久兵衛は測量、勾配計算、さらに資材や資金集めに奔走しました。その功績により、日田市内の田畑に水が安定供給されるようになり、農業生産が飛躍的に向上。城内川の通船計画も実行されました。日田市内に張り巡らされた水路が"水郷日田"の由縁であるともいわれています。まさに、今日まで続く豊かな日田の礎をつくった人物といえるのです。

Great thinkers of Hita
Many great minds came from Hita, which is blessed in multihued factors such as its environment and history. They have left behind achievements in a wide range of fields such as the arts, agriculture and Hita haiku poetry, including Kyube Hirose, who cut opened the aqueduct, which gave rise to Hita being referred to as a Suikyo (riverside town).



岩澤重夫
自然派の近代日本画家
Iwasawa Shigeo

1927年に生まれ、県立日田中学(旧制)を卒業後、京都市立美術専門学校へと進学。『芥子』で第7回日展に入選。その後は、日本画家の堂本印象に師事し、日展をはじめ、多くの賞を受賞しました。1975年には大分で初の個展を開催。

作風は、年を重ねるにつれて花を題材としたものから風景画へ。実験的な造形や抽象傾向のものへと移っていきましたが、最終的には、深山の緑を丁寧な筆使いで表現する自然主義的な風景画を描くようになりました。晩年は、日展の顧問となり、世界遺産である金閣寺(鹿苑寺)客殿障壁画63面を完成、文化功労者にも顕彰されました。

『天水悠々』
350mを誇る、日本一の立山・称名の滝を描いた作品(日田市蔵)

大蔵永常
江戸時代三大農学者の一人
Okura Nagatsune

隈町の製蠟問屋の丁稚として働いていましたが、二十歳前後に頻発した大飢饉を機に、民衆に役立つ作物の栽培方法を確立するため、九州諸国を巡り、栽培や加工技術を学びました。29歳の時、大阪で苗木商を営み、それと同時に初めての著書『農家益』を発表。その後も数々の農業書を執筆しました。

永常農学の特徴は、収穫物を加工、市販し農家に現金収入をもたらすこと。それこそが、農民の暮らしを豊かにする最良の手段という考えが根本にあり、当時としては、先進的な農学者として活躍しました。

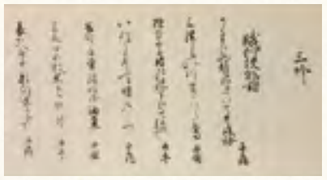
『門田之栄
(かどたのさかえ)』より
(田原市博物館蔵)

『広益国産考』
(大分県立先哲史料館蔵)
1859年に版行された永常の集大成となる農書

中村西国
日田俳諧の開祖
Nakamura Saikoku

豆田下町で町年寄りを務め、農産物を扱う新興商人層の一人、島屋久七の次男として生を受けた中村西国。家督を兄が継いだため、比較的自由な身分で、書は定家風、画は狩野派、その他にも華道や茶湯、浄瑠璃、彫刻などを嗜んでいました。

なかでも俳諧は井原西鶴に師事。延宝5年、西鶴より『俳諧之口伝』の伝授を受け、俳諧の優劣を判定し、報酬を得ることのできる俳諧の点者として独立を許されました。その後は、多くの作品を刊行。天保2年、梅村軒風黒撰の『俳諧高名集』では、全国66人の有名点者に数えられ、没するまで多くの俳諧を残しました。


西国が、井原西鶴、前川由平と各百句を詠んだ『胴骨三百韻(どうぼねさんびゃくいん)』
(天理大学附属天理図書館蔵)